

原町市埋蔵文化財調査報告書 第15集

# 原町市内遺跡発掘調査報告書 2

平成8年度試掘調査

泉廃寺跡（第4次調査）

追合B遺跡

植松B遺跡

地藏堂B遺跡

荷渡古墳群

高見町A遺跡

1997年3月

福島県原町市教育委員会

# 原町市内遺跡発掘調査報告書 2

平成8年度試掘調査

泉廃寺跡（第4次調査）

追合B遺跡

植松B遺跡

地藏堂B遺跡

荷渡古墳群

高見町A遺跡

1997年3月

福島県原町市教育委員会



# 序

文化財は、わが国の長い歴史のなかで生まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものであります。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることができなかった先人の生活の様子や文字がまだなかった時代の人々の生活や文化について私たちに多くの情報を与えてくれます。

近年、原町市内では広範囲にわたり開発の波が押し寄せつつあります。その一方、長い歴史を経て保存されてきた埋蔵文化財が一日にして失われてしまう危険性があります。このような状況のなか、教育委員会では埋蔵文化財の保護のため、開発が行なわれる前に、遺跡の範囲や性格などの資料を得る目的で分布調査や試掘調査を実施しております。

開発に際しては、これらの資料をもとに、関係の方々及び機関と遺跡の保存協議を行ない、保存が困難な場合については、図面や写真などによる記録保存のための発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成8年度に実施した市内遺跡発掘調査事業の試掘調査の成果報告書です。今後この報告書を埋蔵文化財の保護、地域史の研究のために活用していただければ幸いに存じます。

終りに、地権者の皆様をはじめ調査に御協力いただきました方々に心から感謝いたします。

平成9年3月

原町市教育委員会

教育長

井村

寛



## 例 言

- 1 本報告書は、平成8年度に実施した原町市内遺跡の試掘調査報告書である。
- 2 調査は、国及び県の補助金の交付を得て原町市教育委員会が実施した。
- 3 本報告書の執筆及び編集は、原町市教育委員会生涯学習部文化課 鈴木文雄、堀 耕平、荒 淑人が行なった。
- 4 試掘調査、報告書作成にあたり、次の機関および個人から指導助言を得ている。  
文化庁記念物課、福島県教育庁文化課、岡田茂弘、鈴木 啓、西 徹雄、玉川一郎
- 5 調査で得られた資料は、原町市教育委員会が保管している。



# 目 次

序

例 言

目 次

第1章 原町市をとりまく環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第2章 調査遺跡	5
第3章 試掘調査及び調査成果	6
第1節 泉廃寺跡（第4次調査）	6
第2節 追合B遺跡	10
第3節 植松B遺跡	12
第4節 地藏堂B遺跡	16
第5節 荷渡古墳群	18
第6節 高見町A遺跡	22

報告書抄録





# 第1章 原町市をとりまく環境

## 第1節 地理的環境

福島県原町市は、太平洋に面した浜通り地方の、阿武隈高地東縁部東部の低地帯北方、相馬地方のほぼ中央に位置しており、行政境としては北は相馬郡鹿島町、南は小高町、西は飯舘村・双葉郡浪江町と境界を接している。人口は約50,100人、面積は約199.66km<sup>2</sup>で、当地方の産業及び政治面での中核都市となっている。主要交通網は南北方向に縦走するJR常磐線と国道6号線で、仙台方面や市内などへの通勤・通学的手段として利用されている。

原町市の地形は、西部域を南北方向に縦走する阿武隈高地、そこから派生する相双丘陵と称される標高100m以下の低丘陵、及び丘陵間に開析された沖積平野とで構成されている。全体として阿武隈高地にかかる西側が高く、太平洋岸の東部にいくにつれて標高が下がっている。阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯とは双葉断層(岩沼-久之浜構造線)によって地質的に明瞭に区分されている。

阿武隈高地は、東西約50km・南北約200kmの規模をもち、古生代から新生代中頃の新第三紀中新生に至る地質を含み、北上高地と並ぶ日本最古の地質構造を形成している。基盤層は古生代末期のアパラキア褶曲と中生代末期のララマイト褶曲に代表される二度に渡る世界的な造山運動の際に、古生層及び中生層に貫入した古期及び新期・最新期の花崗岩、変成岩類である。地形的には山頂がなだらかな隆起準平原で、原町市西部での標高は500～650m前後になっている。

阿武隈高地裾部から東に派生している低丘陵は、新生代第三紀に形成された固結度の低い凝灰岩質砂岩で構成されており、双葉断層により、上層部の相双丘陵(滝の口層)と中・下層の常磐丘陵地域とに区分されている。阿武隈高地周辺では標高100～150m前後を測り、東延するにしたがって徐々に高度を下げ、海岸部では標高20～30mを測る。第四紀洪積世における氷河期と間氷期の海水準変動により、丘陵上には海成及び河成の段丘が構成され、高位より順に第1段丘、第2段丘と命名されている。原町市内では埋没段丘を含む7段丘の存在が知られており、特に第1段丘である畦原段丘と第4段丘である雲雀ヶ原扇状地が発達しているが、他は河川上流域沿いに小規模に分布している。低丘陵の間には、各河川が樹枝状に開析した谷間に土壌が埋没した沖積平野が入り込んでいる。標高20m以下の沖積平野が広がり、縄文時代前期を中心とする海進期には海岸部の大部分が海水面下にあったと考えられており、大木2 a 式期の遺跡である萱浜の赤沼遺跡の調査では、当時の海岸線は、現在の標高6 m前後と考えられている。市内の沖積平野は現在ではほ場整備が進み、一面の美田地帯が形成されている。

## 第2節 歴史的環境

原町市における旧石器時代の遺跡は、現在のところ9ヶ所が知られている。立地条件を概観すると、畦原A遺跡、熊下遺跡、袖原A遺跡などは太田川流域の第1段丘面(畦原段丘)上に所在し、陣ヶ崎A遺跡、西町遺跡、橋本町A遺跡、桜井遺跡などは新田川流域の第4段丘面(雲雀ヶ原扇状地)に所在している。

縄文時代の遺跡は早期末から前期初頭の住居跡が検出された片倉の八重米坂A遺跡、隣接する羽山B遺跡などが阿武隈高地裾部に所在している。太田川右岸の第1段丘面に所在する片倉の畦原F遺跡の調査では早期末から前期前葉の土坑3基が検出されている。この時期は、阿武隈高地裾部に立地する遺跡がある一方で海浜側の微高地に所在する遺跡も知られている。前期初頭の大木2a式の土器片が出土した萱浜の赤沼遺跡や前期前半の土器片が多量に発見された雫の犬這遺跡は雲雀ヶ原扇状地の裾部の微高地上に所在しており、当該期の海岸線と環境を推定する上での貴重な成果を上げている。

中期の遺跡は、大木9～10式の土器片を多量に出土する押釜の前田遺跡が阿武隈高地裾部の低位丘陵に立地しており、新田川流域の第3段丘面上に所在する上北高平の高松遺跡周辺から西側の平坦面一帯は、末葉の大木8a～10式土器片を出土することで知られている。高松遺跡の東方約1km、第3段丘面上に立地する植松遺跡では、昭和52年(1977)に大木10式期の複式炉を伴う竪穴住居跡1軒が市内で初めて調査されている。

後期から晩期の遺跡は、大洞C1～A式期土器片を出土した片倉の羽山遺跡など多くの遺跡が市内各地に所在している。浜通り低地帯の海岸部には多くの貝塚が所在しているが、原町市内では全く確認されておらず、現在まで空白地帯となっているが、今後発見される可能性を秘めている。

弥生時代の遺跡は、福島県浜通り地方北部の中期末葉の標式土器である桜井式土器を出土する桜井遺跡が知られているが、最近の調査では、海岸部の丘陵の尾根部に小規模な集落を構成している例や弥生土器や石庖丁が出土する例が報告されている。また、平成5年に調査した高見町A遺跡からは弥生時代の後期の十王台式土器を出土し、その北限となる竪穴住居跡が2軒発見されている。

古墳は、前方後方墳として東北第4位の規模を誇る国指定史跡の桜井古墳が新田川右岸の河岸段丘上に所在しており、周辺の古墳と共に桜井古墳群を構成している。桜井古墳は昭和58年(1983)に範囲確認調査が行なわれ、軸長約72mの墳丘部と、幅約11.2mの周溝が巡っていたことが確認された。

他に昭和42年(1967)に、中太田所在の墳丘部軸長約40mの前方後円墳である与太郎内1号墳、高見町1丁目所在の墳丘部直径約12mの円墳である桜井古墳群高見町支群第1号墳の発掘調査が行なわれ、同古墳からは粘土施設を伴う割竹形木棺の痕跡が確認された。平成5年(1993)の高見町A遺跡の調査では、既に削平されてマウンドや埋葬施設は確認できなかったが、

外郭直径約15m、幅約2mの円形の周溝1基が発見され、高見町第2号墳と命名されている(桜井古墳群高見町支群第2号墳)。この調査では塩釜式期の竪穴住居跡2軒が市内では初めて発見されており、この遺跡が弥生時代から古墳時代への変遷や古墳の出現過程を理解するうえで極めて重要であることを示している。

この他、市内各地の丘陵上に古墳が築かれており、北泉の地藏堂古墳群、江井の西谷地古墳群、小木迫の五治郎内古墳群などが所在している。

終末期になると、当地方でも横穴古墳が多く作られている。現在確認されている分布状況を見ると、新田川左岸の上北高平に北沢横穴群、京塚沢横穴群、新山前横穴群、北泉に大磯横穴群、地藏堂横穴群、太田川左岸の上太田に道内迫横穴群、大甕に西迫東迫横穴群、雫に坂下横穴群、太田川右岸の高には、昭和40年(1965)に調査された高林古墳群などが河川流域の沖積平野を望む丘陵に所在しており、高塚古墳の分布のあり方とほぼ合致している。また、中太田の中畑横穴群、羽山横穴群、上太田の新橋横穴群は、雲雀ヶ原扇状地を望む丘陵に所在している。このうち、昭和48年(1973)に発掘調査が行なわれた国指定史跡の羽山横穴は、玄室奥壁・側壁・天井部に壁画が描かれており、調査後に保存処理を施して年4回の一般公開を通して社会教育に役立っている。

奈良・平安時代の遺跡は、律令体制のもとに行方郡家に推定されている泉廃寺跡や軍団跡の可能性が指摘されている植松廃寺跡が新田川左岸の丘陵裾部に所在しているが、これらの遺跡からは瓦が出土しており、供給源として泉廃寺は大甕の京塚沢瓦窯跡が、植松廃寺は昭和59年(1984)に発掘調査が行なわれた入道迫瓦窯跡が考えられている。この他、馬場の滝ノ原遺跡では平安時代の須恵器窯跡3基が調査され、杯、長頸瓶などが出土している。

また、海岸部の金沢の丘陵の一角には大規模な製鉄遺跡が所在している。平成元年度から5年度までに、財団法人福島県文化センター遺跡調査課により発掘調査が進められた結果、7世紀後半から9世紀の製鉄炉123基・鍛冶炉16基・木炭窯140基・竪穴住居跡121軒・掘立柱建物跡10棟など全国最大規模の製鉄遺跡であり、内容においても古代の鉄生産に関する技術や社会的背景などを知る上で多大な成果が報告されている。

この時期になると、土師器や須恵器を出土する遺跡が増加するが調査例は少ない。立地の変化としては新田川や太田川流域の河岸段丘の平坦面、あるいは自然堤防上など、これまで遺跡が少なかった平野部の微高地にも多くの遺跡が立地している。特に延喜式内社の押雄神社・冠嶺神社を中心とする北長野一帯、多珂神社・日祭神社を中心とする大甕一帯、太田川中流域の上太田一帯、桜井の河岸段丘面にこの時期の遺跡が多く所在している。大甕地区ほ場整備事業に関連して平成2年に範囲確認調査が実施された米々沢の竹花A遺跡では、奈良～平安時代の竪穴住居跡3軒が確認されており、平成4年には上北高平の高松B遺跡でも奈良～平安時代と推定される竪穴住居跡2軒が試掘調査により確認されている。

中世の遺跡として城館跡が挙げられるが、信田沢の内城のように現在では所在地不明のものや城館の構造が不明確なものも多い。その中でも、北泉の泉館跡は、中世山城の典型的な形態をとどめている。館主は相馬氏の一族、泉氏といわれ、その重要性から市指定史跡となってい

る。他にも、牛越城跡・大甕七館の一つである明神館跡・相馬氏の奥州下向の際、最初の拠点となった別所の館跡などが比較的良好な中世山城の形態を残して所在しており、在地の領主の館跡も丘陵上や平野部の各地に点在しているが、発掘調査の手続きもなされないまま、部分的な破壊を受けているものも見受けられる。

中世の村落遺跡の把握は難しいが、太田川左岸の自然堤防上に立地する、米々沢の谷地畑遺跡はその可能性が高い。平成2年に範囲確認調査が実施され、祥符元寶などの北宋銭が出土しており、中世から近世にかけての遺跡と推定される。

近世の遺跡として、慶長2年(1597)から8年(1603)に相馬氏の居城として再整備されて使用された牛越城跡や寛文6年(1666)以降に築かれた野馬土手と野馬追原の出入口となる木戸跡がある。野馬土手は、野馬追に欠かせない野生馬の保護に力を尽くしてきた結果、増殖した馬が畑の作物を荒らしたり、放散しないように雲雀ヶ原扇状地を囲むように、東西約10km、南北約2.6kmにわたって築かれたものである。大部分は土塁であるが、石垣としていた所もある。平成5年には、小高町が菖蒲沢で石垣の野馬土手の一部分を調査している。現在では野馬土手の多くが消滅しており、その保護が急がれるが、昭和62年(1987)の桜井野馬土手の範囲確認調査及び、平成5年の牛来、歴史民俗資料館予定地における調査では、土手の規模と野馬追原の内側に溝を掘っていた状況が確認されている。木戸跡は、多い時で30数ヶ所が設けられていたといわれているが、現在その姿を明瞭にとどめているものは市指定史跡の羽山岳の木戸跡である。

近世後半から近代の遺跡としては藩営の大規模な製鉄遺跡として馬場鉄山があり、周辺の小規模な製鉄遺跡としては財団法人福島県文化センター遺跡調査課により調査された馬場の五台山B遺跡、片倉の羽山B遺跡が阿武隈高地の山間部に遺されている。

#### 参考文献

- 1965 竹島國基他 『原町市高林古墳群調査報告書』 原町市教育委員会
- 1969 竹島國基他 『原町市高見町1号墳・与太郎内1号墳調査報告』 原町市教育委員会
- 1974 渡辺一雄他 『羽山装飾横穴発掘調査概報』 原町市教育委員会
- 1983 長島雄一 『赤沼遺跡試掘調査報告』 原町市教育委員会
- 1985 玉川一郎 『国指定史跡桜井古墳範囲確認調査報告書』 原町市教育委員会
- 1988 玉川一郎 『野馬土手跡範囲確認調査報告書』 原町市教育委員会
- 1990 玉川一郎・小野田義和 『原町市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』 原町市教育委員会
- 1991 玉川一郎・西谷 勉 『原町市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』 原町市教育委員会
- 1993 武田耕平 『(仮称)福島県立浜通り高等技術専門校建設関連遺跡発掘調査報告書(巢掛場遺跡)』 原町市教育委員会
- 1994 武田耕平 『県道相馬浪江線付替え工事関連遺跡発掘調査報告書(畦原F遺跡)』 原町市教育委員会
- 1996 堀 耕平 『県道相馬浪江線付替え工事関連遺跡発掘調査報告書(原遺跡)』 原町市教育委員会
- 辻 秀人 『桜井高見町A遺跡発掘調査報告書』 東北学院大学文学部史学科辻ゼミナール・原町市教育委員会

## 第2章 調査遺跡

原町市における近年の埋蔵文化財調査の傾向としては、ガットのウルグアイラウンド対策を盛り込んだ大型のほ場整備事業関連の調査件数・調査面積が大半を占める状況にあるが、その他各種開発に関連する調査が増えつつある。

平成8年度の国・県補助事業にかかる調査遺跡は6遺跡である。県営ほ場整備事業及び県道改良計画にかかる遺跡の範囲確認調査では、市内泉地区の泉廃寺跡(第4次調査)がある。宿舍用地造成関連では、金沢地区の追合B遺跡がある。残土置場計画関連では、上北高平地区の植松B遺跡がある。原町市の海浜公園整備事業関連では、北泉地区の地藏堂B遺跡がある。個人の農地造成関連では、下北高平地区の荷渡古墳群がある。また、個人の住宅建築関連では、福島県浜通り地方北部の弥生時代中期土器(桜井式土器)の標式遺跡である高見町1丁目所在の高見町A遺跡がある。



- |         |          |         |          |
|---------|----------|---------|----------|
| 1 泉廃寺跡  | 2 追合B遺跡  | 3 植松B遺跡 | 4 地藏堂B遺跡 |
| 5 荷渡古墳群 | 6 高見町A遺跡 |         |          |

図1 遺跡位置図

0 2km  
(1/50000)

# 第3章 試掘調査及び調査成果

## 第1節 泉廃寺跡(遺跡番号20600097)(第4次調査)

所在地 原町市泉字町池・宮前・寺家前・町  
調査期間 平成8年4月22日から平成9年1月31日まで  
調査面積 1,600m<sup>2</sup>  
事業種別 遺跡の範囲確認のための試掘調査  
調査担当 堀 耕平

### 遺跡概要

遺跡は、新田川左岸の沖積地から河岸段丘面に立地する。古代の瓦や炭化米が出土し、建物跡の礎石が点在することから、古代の寺院跡として、昭和30年(1955)に福島県の史跡指定を受けた。近年では、古代行方郡の郡家跡との見方が有力である。遺跡の推定面積は約120,000m<sup>2</sup>、そのうち史跡指定面積は約47,000m<sup>2</sup>である。昭和40年(1965)に、県立原町高等学校の郷土史研究部が礎石等の分布調査を行なった以外は、遺跡の範囲や内容についての発掘調査は実施されていなかった。平成6年度から県営ほ場整備事業に関連して、主に史跡指定範囲の周囲について試掘調査を行い、平成7年度には、官衙的な様相を呈する遺構が検出された。保存協議の結果、ほ場整備事業に伴い改修する武須川<sup>ぶすがわ</sup>の計画路線を変更し、重要な部分を保存することとなった。

### 調査概要

調査対象区域に任意の大きさのトレンチを設定し、遺構の検出状況により、トレンチの拡張や新たなトレンチの設定を行なった。

### 調査成果

遺構 奈良・平安時代の掘立柱建物跡2棟、掘込地業1基、溝跡6条(区画溝跡含む)

遺物 奈良・平安時代の土師器、須恵器、瓦、木製鉢

### 所 見

掘込地業は、礎石建物跡のものと推測され、これを囲むように検出された溝跡は、区画施設と考えられる。現在のところ、区画溝跡は正倉院の区画施設と考えられる。

今回、郡衙跡を構成する院の一部が発見されたことから、この部分については史跡指定等の方策を講じ、将来にわたって保存すべきものと判断される。



図2 調査区位置図

0 200m (1/10000)



写真1 トレンチ配置状況(南から)



写真2 遺構検出状況(南から)



写真3 区画溝跡と掘込地業(上が北)



写真4 区画溝跡屈曲部(北から)





写真5 屈曲部から南を望む(北から)



写真6 屈曲部土層断面(北から)



写真7 1号トレンチ区画溝跡(北から)



写真8 7号トレンチ区画溝跡(西から)



写真9 掘込地業(西から)



写真10 27号トレンチ検出状況(北から)

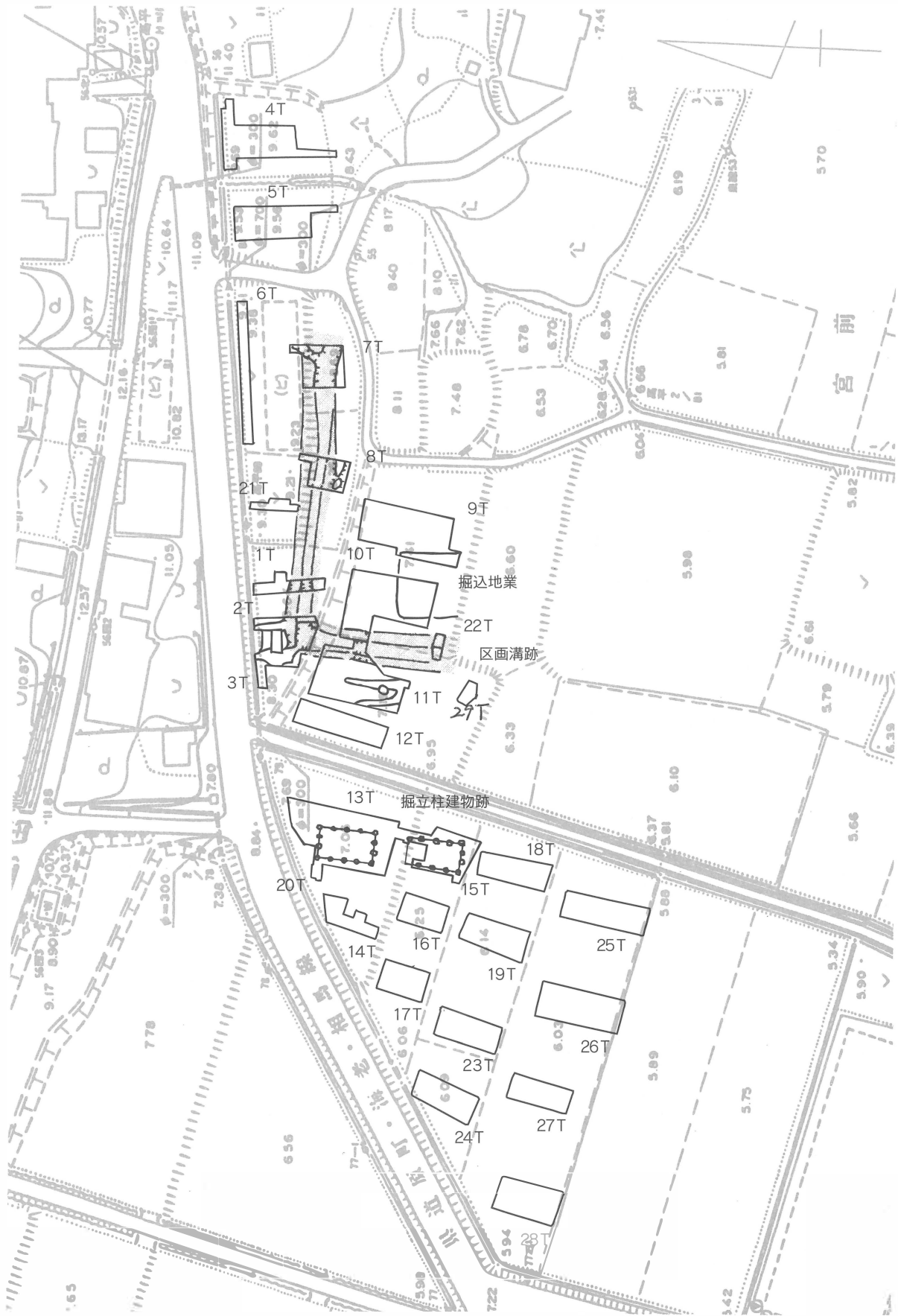


図3 トレンチ・主要遺構配置図

## 第2節 追合B遺跡(遺跡番号20600008)

所在地 原町市金沢字追合

調査期間 平成8年4月2日から4月9日まで

調査面積 200m<sup>2</sup>

事業種別 宿舍用地造成にかかる保存協議の資料を得るための試掘調査

調査担当 鈴木文雄

### 遺跡概要

遺跡は阿武隈高地から東に派生する低位丘陵に位置する。当遺跡からは、弥生土器、磨製石斧、土師器、須恵器、円面硯、鉄滓が採集されており、弥生時代、奈良・平安時代の遺跡として知られている。周辺には、奈良・平安時代の大規模な製鉄遺跡群である金沢地区遺跡群や鹿島町大迫遺跡などの製鉄遺跡が所在している。

### 調査概要

今回の調査区の西側は既に削平あるいは盛土されており、残された斜面部に鉄滓や羽口の散布がみられた。法面掘削予定範囲である斜面部の表土除去の後、遺構検出を行なった。また、必要に応じて遺構内にサブトレンチを入れた。

### 調査成果

遺構 奈良・平安時代の製鉄炉1基、廃滓場1基

遺物 奈良・平安時代の羽口、鉄滓

### 所 見

検出遺構は、奈良・平安時代の製鉄遺構である。開発に際しては、計画変更・工法対応が望ましいが、困難な場合には発掘調査が必要である。



写真11 遺跡近景(西から)



写真12 奈良・平安時代の製鉄炉跡(SW1)(北から)



写真13 奈良・平安時代の廃滓場(SW2) (南西から)



写真14 製鉄炉(SW1)・廃滓場(SW2) (南から)

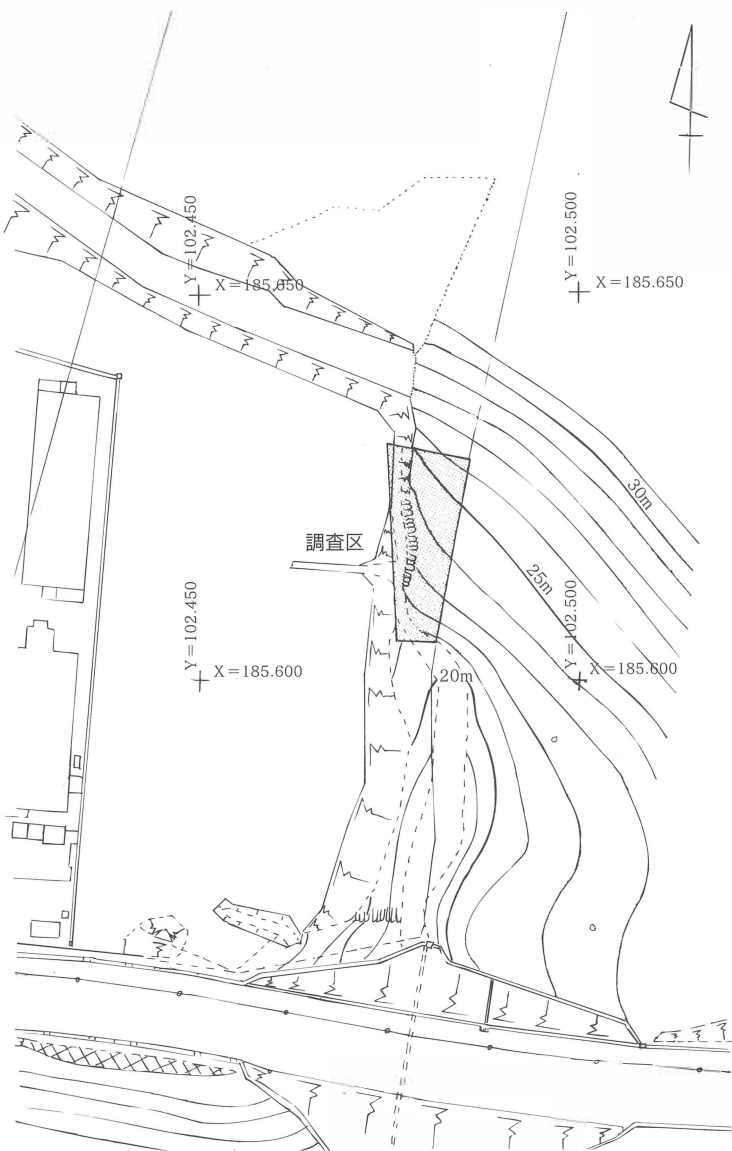


図4 調査区位置図

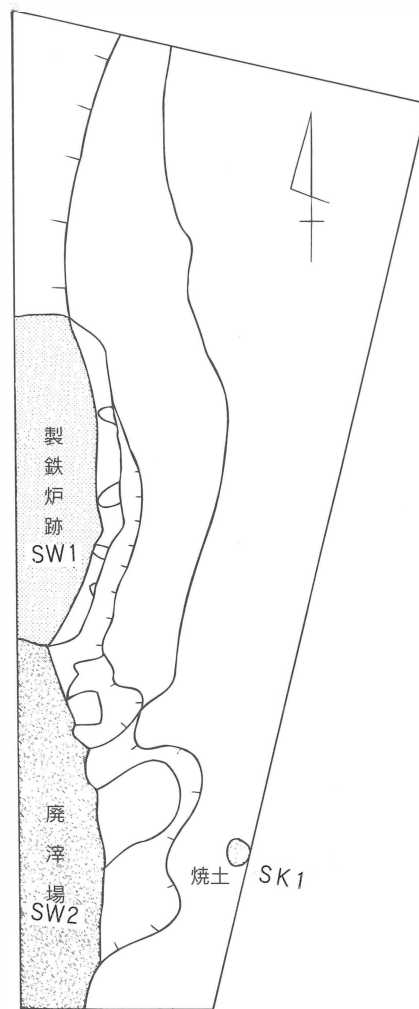


図5 遺構配置図



## 第3節 植松B遺跡(遺跡番号20600021)

所在地 原町市上北高平字植松

調査期間 平成8年4月26日から6月26日まで

調査面積 540m<sup>2</sup>

事業種別 残土置場計画にかかる保存協議の資料を得るための試掘調査

調査担当 荒 淑人

### 遺跡概要

遺跡は、原町市の北部を東流する新田川によって形成された河岸段丘上に立地する。調査区は、JR常磐線と県道相馬・浪江線に挟まれた南北に長い区域である。標高は、33～36mである。現状は、雑木林と荒地になっている。遺跡からは、縄文土器、石器、土師器、瓦などが採集されていることから、縄文時代、奈良・平安時代の遺跡とされている。また、遺跡範囲の南部は、古代寺院あるいは行方郡衙の軍団跡と推定されている植松廃寺跡と重複する。

### 調査概要

調査はトレンチによる調査を行なった。トレンチは2×10mを基本とし、調査の状況に応じて拡張した。ところによってはトレンチの設定が不可能な箇所もあったものの、可能な限りトレンチを設定した。

### 調査成果

遺構 奈良・平安時代の掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡1軒、溝跡12条

第1号掘立柱建物跡は、東西2間以上×南北4間の中抜き建物跡である。今回の調査では柱列の西側と南側の一部を確認した。柱穴の形状は、40×50cmの方形を呈する。また、この柱穴が切り合う状況が確認されることから、2度にわたる建て替えが行なわれたものと考えられる。2度目の建物の柱痕の覆土に焼土を含むことから、2度目の建物は焼失したものと考えられる。

竪穴住居跡は、調査区の関係で住居跡の全体は確認できなかったが、住居跡の北辺を確認した。北辺にはカマドがあり、東西7.50mの隅丸方形を呈すると考えられる。

遺物 奈良・平安時代の土師器、須恵器、平瓦、羽口、鉄滓

### 所 見

調査の結果、掘立柱建物跡や出土した土師器、須恵器から、遺跡は奈良・平安時代のものと考えられる。近くには、植松廃寺跡が存在することから、植松廃寺跡に関連する建物の一部と考えられる。遺跡の詳細は、今後の調査成果に期待するところが大きい。今回建物跡が初めて検出されたことは重要である。

開発にあたっては、工法対応が望ましいが、困難な場合には発掘調査が必要である。

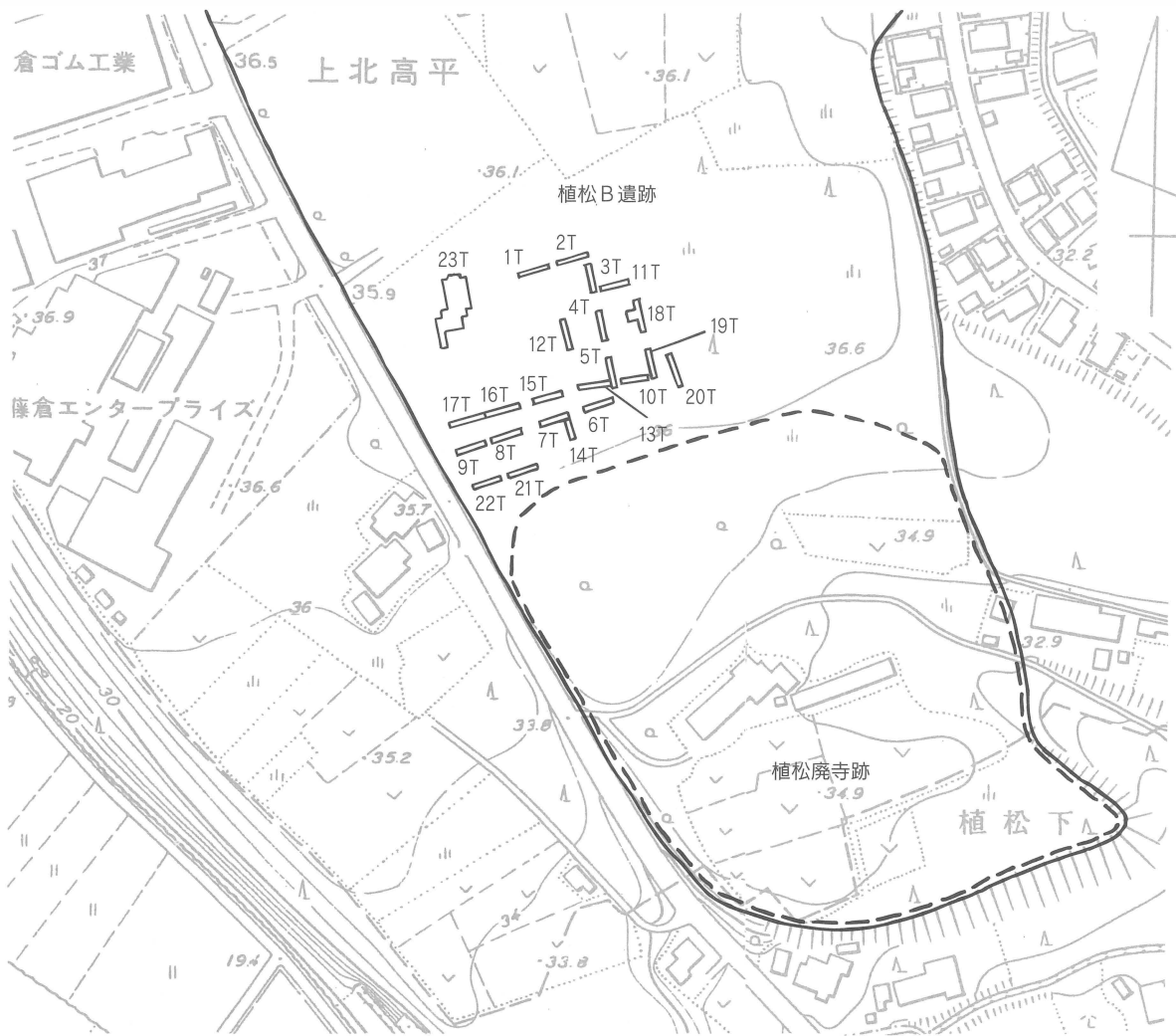


図6 調査区位置図

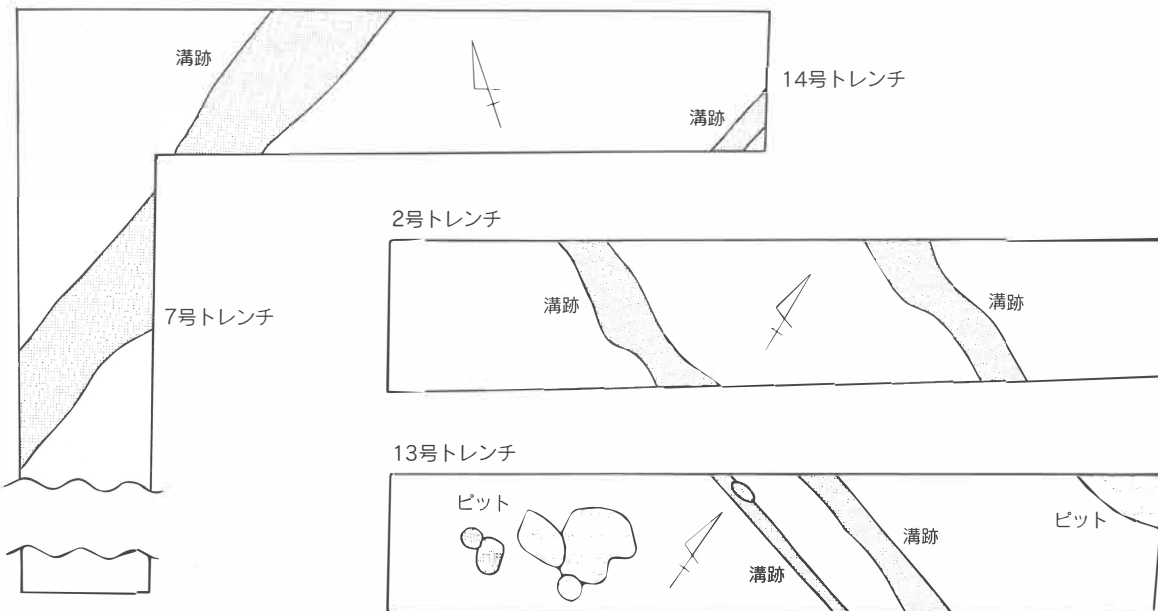


図7 2・7・13・14号トレンチ平面図



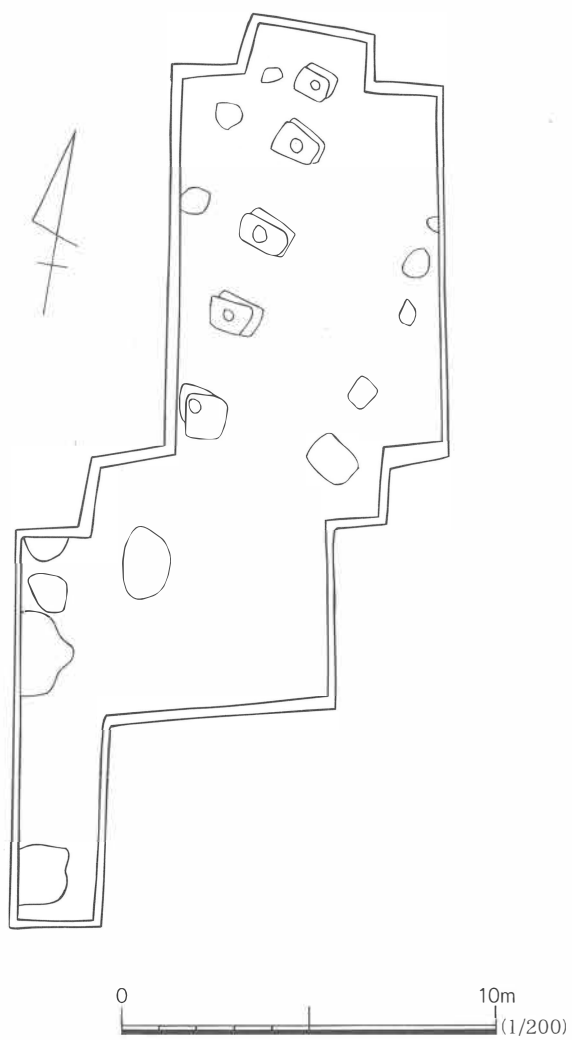


図8 23号トレンチ平面図



写真15 作業状況(北から)



写真16 7・14号トレンチ(西から)



写真17 13号トレンチ(北東から)



写真18 23号トレンチ(北から)

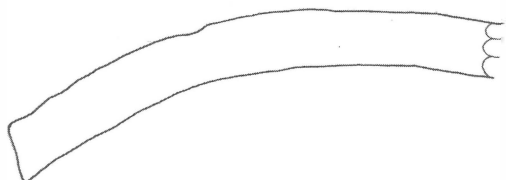
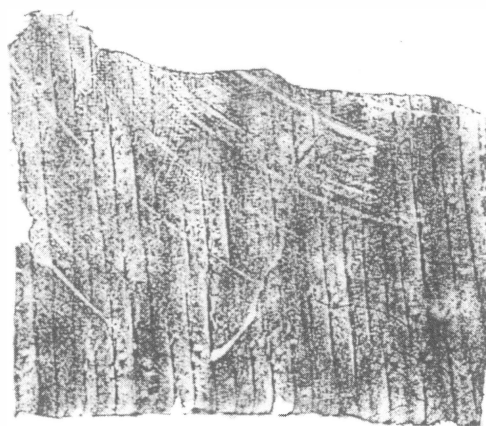
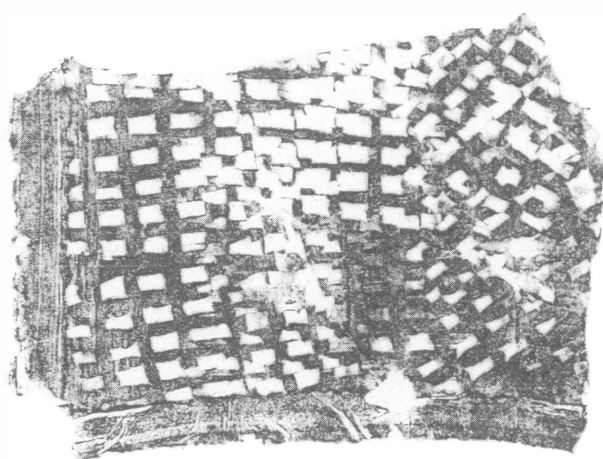


図9 14号トレンチ出土瓦

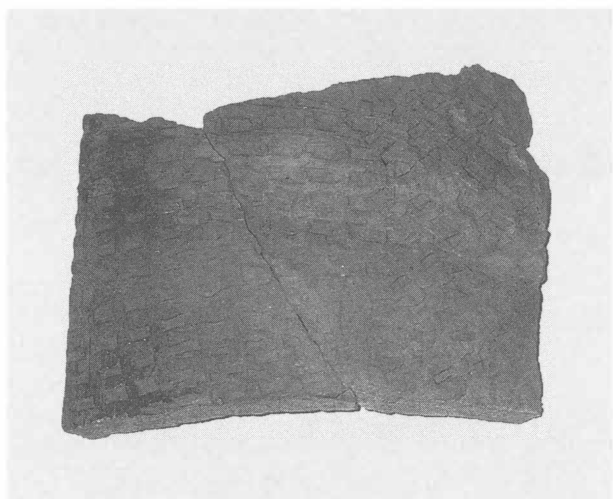


写真19 出土瓦凸面

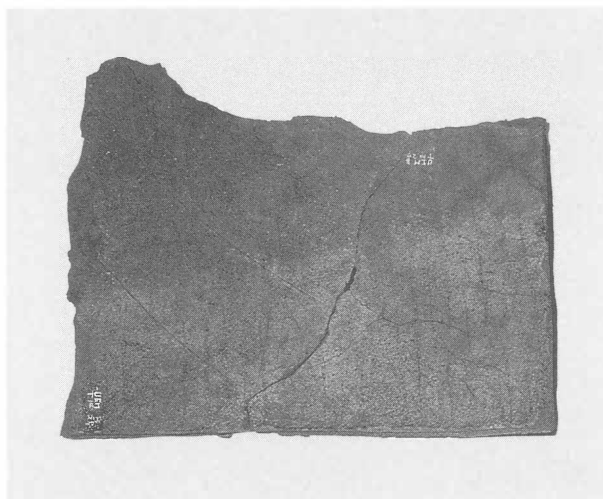


写真20 出土瓦凹面



写真21 土器出土状況(東から)



写真22 土器出土状況(南から)



## 第4節 地蔵堂B遺跡(遺跡番号20600203)

所在地 原町市北泉字地蔵堂

調査期間 平成8年5月17日から7月5日まで

調査面積 1,100m<sup>2</sup>

事業種別 海浜公園整備事業にかかる保存協議の資料を得るための試掘調査

調査担当 堀 耕平

### 遺跡概要

遺跡は、阿武隈高地から東に派生する低位丘陵の東端に位置している。標高は5～26mを測る。弥生土器、石庖丁、土師器が採集されることから、弥生時代から古墳時代の遺跡と考えられている。遺跡の頂部及び北端部は既に削平されている。

### 調査概要

開発計画の道路用地が調査対象範囲である。道路用地の南西部分は、遺構・遺物の検出される可能性が低いことから工事立ち会いとし、遺構の存在が予想される北東部分は、全面表土除去の後検出作業を行なった。

### 調査成果

検出遺構はすべて北東部分からのもので、工事立ち会いとした南西部分からの検出遺構・遺物はなかった。

遺構 古墳時代後期の竪穴住居跡4軒

奈良・平安時代の焼成土坑16基

江戸時代・近代の土坑墓17基

遺物 弥生土器、古墳時代後期の土師器、江戸時代・近代の鉄鍋・キセル・寛永通宝

### 所 見

調査の結果、弥生時代から近代までの遺構・遺物が検出された。開発にあたっては計画変更・工法対応が望ましいが、困難な場合には発掘調査が必要である。



写真23 遺跡近景(南から)



写真24 表土除去後(南から)

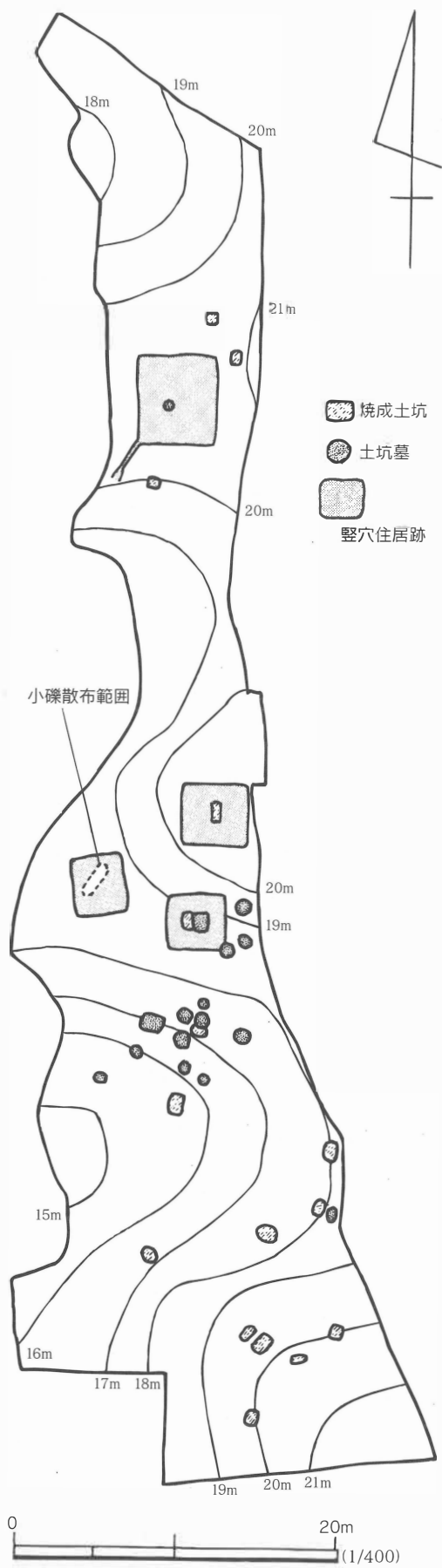


図10 遺構配置図



写真25 焼成土坑検出状況(北から)



写真26 土坑墓鉄鍋出土状況(南から)



写真27 小礫散布状況(西から)

## 第5節 荷渡古墳群(遺跡番号20600027)

所在地 原町市下北高平字荷渡

調査期間 平成8年6月27日から10月18日まで

調査面積 1,200m<sup>2</sup>

事業種別 農地造成にかかる保存協議の資料を得るための試掘調査及び本調査

調査担当 荒 淑人

### 遺跡概要

本遺跡は、阿武隈高地から東に派生する低位丘陵の南辺に位置している。以前から弥生時代中期の桜井式土器が採集されているほか、4基の盛土の存在が知られていたが、東端の1基は削平されて3基が現存していた。標高は45～49mで原町市街が一望できる。また、地元住民の話によると、第1号墳の墳丘には、昭和の初め頃まで氷川神社が祀られていたが、焼失したため、南方約1kmの現在地に遷座したという。現在は神社の痕跡は確認できないが、この古墳が以前から信仰の対象とされていたことがうかがえる。

### 調査概要

調査は古墳の地形測量から実施した。墳丘測量図は25cmコンターで作成した。墳丘の調査はセクションベルトを十字に設定し、セクションベルトを残して墳丘を掘り下げながら埋葬施設の検出を行なった。古墳は西から第1号墳、第2号墳、第3号墳とした。

### 調査成果

遺構 古墳時代後期の古墳3基

江戸時代の土坑墓1基

測量調査の結果、3基の古墳はすべて円墳であり、第1号墳は直径15m、高さ1.25m、第2号墳は直径15m、高さ1.75m、第3号墳は直径12m、高さ1.25mで3基はほぼ同一規模の古墳である。埋葬施設は、3基とも墳頂から約1.20m下の墳丘基底面で検出した。埋葬施設の掘方は4.87m×2.30mの長方形を呈し、3基とも凝灰質泥岩の地山を竪穴式に掘り下げ作られている。3基とも木棺直葬で、第2号墳は割竹形木棺であったことが確認された。

遺物 弥生土器、石庖丁、磨製石斧、古墳時代後期の土師器・刀子、江戸時代の鏡・寛永通宝  
所 見

試掘調査の段階で3基の盛土のすべてから埋葬施設を検出し、古墳であることを確認して、保存協議を行なったが、保存が困難なため、本調査を実施した。本調査の結果、古墳時代後期の群集墳と考えられるが、横穴式石室を採用しない古墳群であることは、この地域の古墳時代後期の墓制の地域性を解明するうえで重要である。



図11 調査区位置図

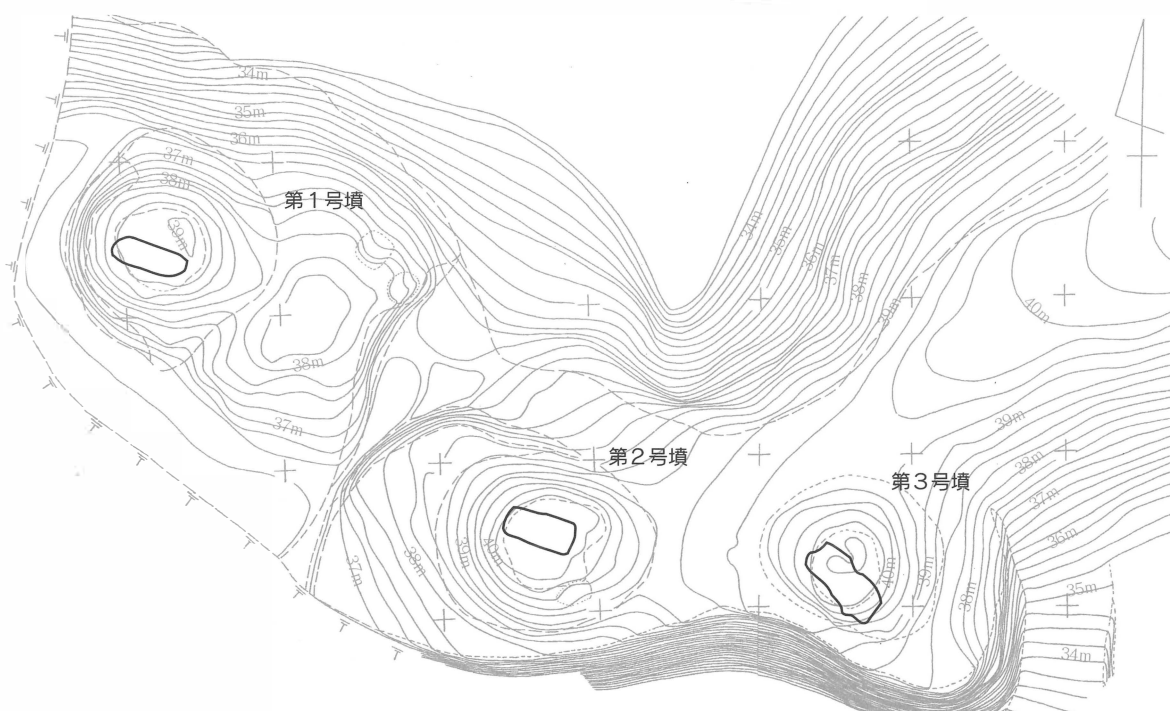


図12 古墳群平面図及び地形図

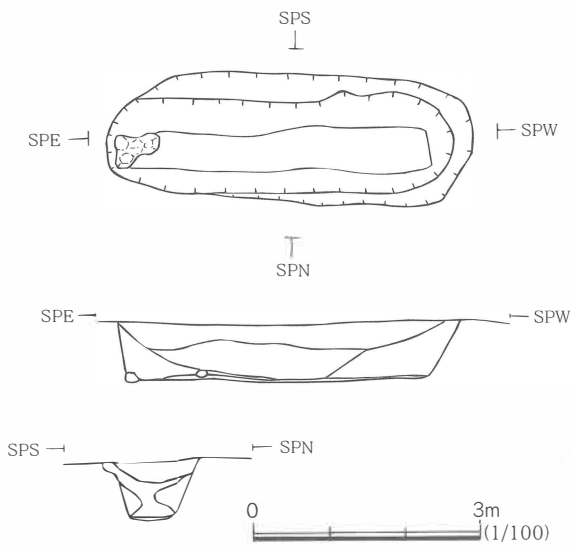


図13 第1号墳主体部



写真28 第1号墳全景(東から)

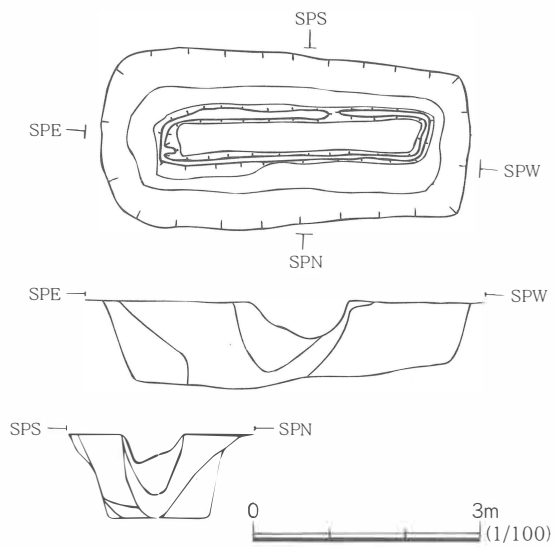


図14 第2号墳主体部



写真29 第2号墳全景(東から)

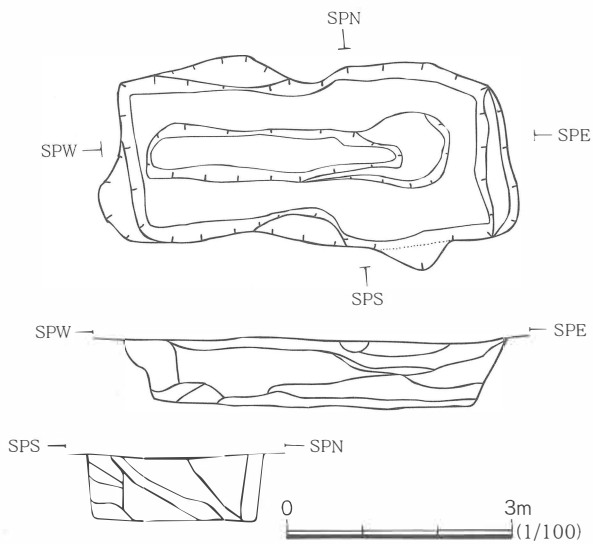


図15 第3号墳主体部



写真30 第3号墳全景(北から)



写真31 遺跡全景(北東から)



写真32 第2号墳土器出土状況(東から)

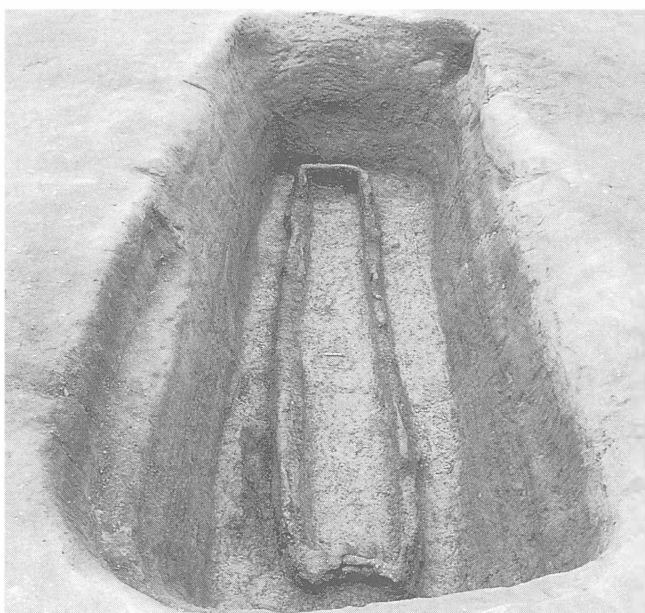


写真33 第2号墳埋葬施設(東から)



写真34 第3号墳埋葬施設(西から)



写真35 第2号墳刀子出土状況(東から)



写真36 作業風景(南西から)

## 第6節 高見町A遺跡(遺跡番号20600215)

所在地 原町市高見町1丁目  
調査期間 平成8年8月19日から9月10日まで  
調査面積 950m<sup>2</sup>  
事業種別 住宅建築に伴う本調査  
調査担当 鈴木文雄

### 遺跡概要

本遺跡は、原町市北部を東流する新田川右岸の河岸段丘上に位置している。標高は約14mである。本遺跡は旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、江戸時代の複合遺跡である。特に本遺跡一帯は弥生時代中期の浜通り地方北部の標式土器である桜井式土器の標式遺跡にもなっている。遺跡の東には大型の前方後方墳である国指定史跡桜井古墳が位置し、高見町支群と上渋佐支群からなる桜井古墳群を形成している。なお、桜井古墳は現在、史跡整備中である。発掘調査はこれまで4次にわたり実施されている。昭和42年(1967)に原町市教育委員会が高見町支群1号墳の主体部を調査している。平成5年(1993)には市教育委員会が調査主体、東北学院大学の辻秀人助教授が調査担当で発掘調査が行なわれ、弥生時代後期(十王台式期)の竪穴住居跡2軒、古墳時代前期(塩釜式期)の竪穴住居跡2軒、円墳の周溝1基が検出された。平成7年(1995)には、範囲確認の試掘調査及び市道改良工事予定地の試掘・発掘調査により、古墳11基、小児埋葬用刳抜石棺3基、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡31軒等多数の遺構が検出されている。以上の調査により、本遺跡は遺構密度が高く、特に弥生時代から古墳時代への変遷を解明するうえで重要な遺跡として考えられている。

今回の調査区は、平成5年の調査区の北西隣に位置する。

### 調査概要

斜面部は段丘崖であるため、工事立ち会いとした。平坦面は、調査区内で廃土処理を行なわざるを得なかったため、調査を2度に分けて行なった。バックホーによる表土除去後、遺構精査を行ない、調査終了後は、表土の埋め戻しを行なった。

### 調査成果

遺構 縄文時代晩期の竪穴住居跡1軒

弥生時代中期の竪穴住居跡2軒、後期の竪穴住居跡3軒、弥生時代の土坑墓3基

古墳時代前期の方形周溝墓1基・土器棺墓1基、後期の古墳(円墳)4基

平坦面の狭い区域から、多数の遺構が検出された。縄文時代の住居跡は市内では初めての検出例である。18号墳では埋葬施設が確認された。埋葬施設は割竹形木棺で上下の棺の接合部及び両端部には粘土を貼りつけている。粘土の部分から刀子が1点出土した。裏込め部分からは6世紀後半の朱彩の土師器杯が3点完形で出土している。桜井古墳群を構成する小円墳の年代、比定ができる初めての成果である。また、土師器甕の土器棺墓が1基検出されたが、火葬骨を

納めた骨蔵器ではなく、土師器の土器棺墓は特異な例である。

遺物 縄文時代晩期土器、弥生時代中期・後期土器、石庖丁・磨製石斧・石ノミ、古墳時代前期の土師器・後期の土師器・刀子

所 見

縄文時代晩期、弥生時代中期・後期、古墳時代前期・後期の遺構・遺物が多数検出されたことから、この遺跡は長時期にわたり集落・墓域が形成された複合遺跡で、遺構密度も極めて高いことがあらためて確認された。市内でも有数の規模と内容をもつ遺跡であるため、保存が望ましいが、度重なる協議の末、やむを得ず開発することとなった。基礎工事に際しては、遺構に影響を及ぼさないような工事方法を講じる必要がある。

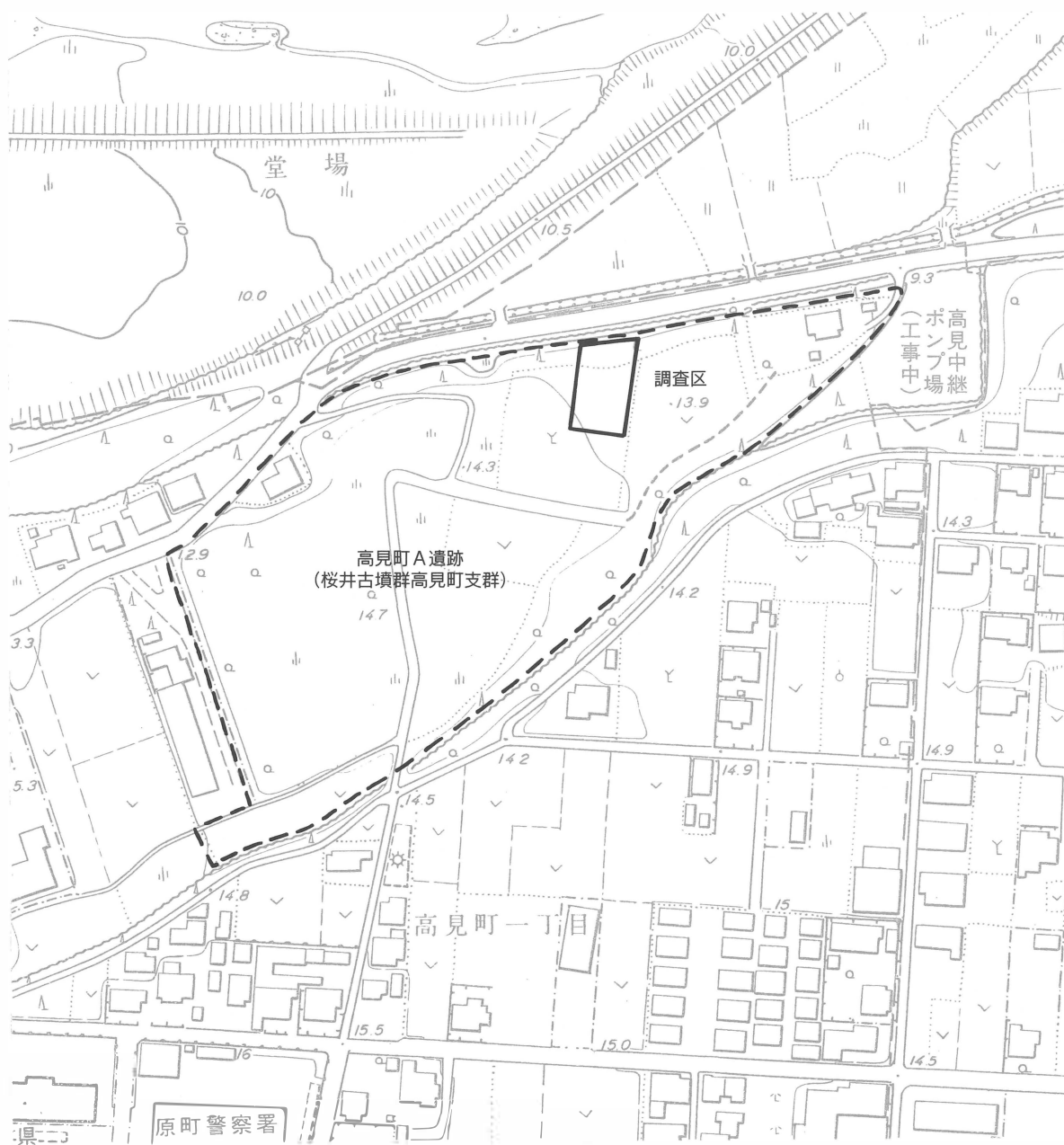


図16 調査区位置図



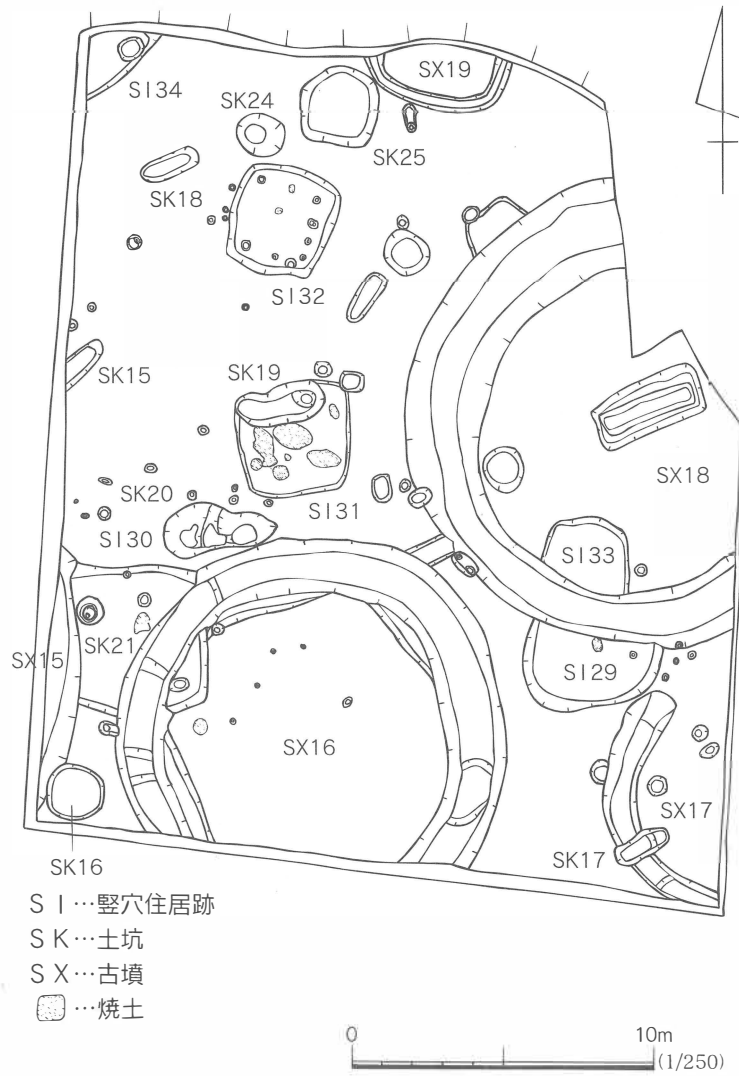


図17 遺構配置図



写真37 調査区全景(南から)



写真38 遺跡近景(南西から)



写真39 縄文時代晩期住居跡(S I 31)(東から)



写真40 弥生時代後期住居跡(S I 33)(南から)



写真41 古墳時代前期住居跡(S I 32)(南から)



写真42 古墳時代前期土器棺墓(S K 21)(南から)



写真43 古墳時代後期古墳(S X 18)(南西から)



写真44 S X 18主体部遺物出土状況(上が北)

報 告 書 抄 録

ふりがな	はらまちしないいせきはつちようさほうこくしょに						
書名	原町市内遺跡発掘調査報告書2						
副書名	平成8年度試掘調査 泉麿寺跡(第4次調査)・追合B遺跡・植松B遺跡 ・地蔵堂B遺跡・荷渡古墳群・高見町A遺跡						
シリーズ名	原町市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第15集						
編著者名	鈴木文雄・堀 耕平・荒 淑人						
編集機関	福島県原町市教育委員会生涯学習部文化課						
所在地	〒975 福島県原町市三島町2丁目45番地 TEL.0244(24)5284						
発行年月日	西暦 1997年3月31日						
所収遺跡	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査 面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
いずみはいじあと 泉麿寺跡 (第4次調査)	はら まし いずみあざてらけまえ 原町市泉字寺家前	07206 00097	37° 39' 50"	141° 00' 50"	19960422 ～ 19970131	1600	範囲確認
おい あい びい せき 追合B遺跡	はら まし かねさわあざ おい あい 原町市金沢字追合	07206 00008	37° 39' 05"	140° 59' 20"	19960402 ～ 19960409	200	宿舎用地 造成
うえまつびい せき 植松B遺跡	はら まし かみきたたかひら あざうえまつ 原町市上北高平字植松	07206 00021	37° 39' 15"	140° 58' 00"	19960426 ～ 19960626	540	残土置場 計画
じぞうどう びい せき 地蔵堂B遺跡	はら まし きたい ずみあざ じぞうどう 原町市北泉字地蔵堂	07206 00203	37° 39' 05"	141° 01' 10"	19960517 ～ 19960705	1100	海浜公園 整備事業
にわたりこふんぐん 荷渡古墳群	はら まし しもきたたかひら あざにわたり 原町市下北高平字荷渡	07206 00027	37° 39' 15"	140° 59' 50"	19960627 ～ 19961018	1200	農地造成
たかみちようえい せき 高見町A遺跡	はらまちし たかみちよういっしょうめ 原町市高見町1丁目	07206 00215	37° 38' 15"	141° 59' 25"	19960819 ～ 19960910	950	住宅建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
泉麿寺跡	官衙跡	奈良・平安時代	掘込地梁1基、区画溝跡1条		土師器、須恵器、瓦、木製鉢	県史跡	
追合B遺跡	生産遺跡	弥生、奈良・平安時代	製鉄廃滓場1基、炭窯跡1基		羽口、鉄滓		
植松B遺跡	城館跡	縄文、奈良・平安時代	竪立住居跡1棟、竪穴住居跡1軒		土師器、須恵器、平瓦、羽口		
地蔵堂B遺跡	集落跡、墓	弥生、古墳、江戸時代	竪穴住居跡4軒、土坑墓17基		弥生土器、土師器、鉄鏃、銭貨	土製勾玉、土製鏃先	
荷渡古墳群	古墳	弥生、古墳時代	古墳8基、土坑墓1基		弥生土器、石庵丁、土師器、鏡		
高見町A遺跡	集落跡、古墳	弥生、古墳時代	竪穴住居跡6軒、円墳4基、土坑墓3基		弥生土器、土師器、刀子	桜井式土器標式遺跡	

原町市埋蔵文化財調査報告書 第15集

原町市内遺跡発掘調査報告書 2

平成9年3月31日 発行

発 行 福島県原町市教育委員会

〒975 福島県原町市本町二丁目27番地

印 刷 有限会社ライト印刷

〒975 福島県原町市北新田字信田370番地-1